

シラバス詳細

タイトル「2023年度」、カテゴリ「基盤教育センター (教養)」

科目情報

科目名

民主主義とは何か

担当教員

中井 遼

学年

1年

開講学期

1学期

曜日・時限

水 2

科目種別

講義科目

科目区分

-

単位数

2

備考

講義名

★民主主義とは何か

実務経験のある教員による講義

キャンパス区分

北方

開講時期

春期

講義室

C-203

ナンバリング

-

単位区分

-

準備事項

直接参照URL

https://gakumu-web.kitakyu-u.ac.jp/lcu-web/SC_06001B00_22/referenceDirect?subjectID=000600013849&formatCD=1

講義情報

ディプロマポリシー・到達目標

項番	内容	対象	到達目標
DP1	知識	-	-
DP2	技能	-	-
DP3	思考・判断・表現力	◎	民主主義について論理的に思考し、自分の考えや判断を適切な方法で表現する力を身につけている。
DP4	コミュニケーション力	-	-
DP5	自律的行動力	○	民主主義に関する課題を自ら発見し、解決のための学びを継続する意欲を有している。

授業の概要

民主主義／デモクラシー／民主制とは何か。まずそれは単に選挙で物事を決めるだけの事ではない。選挙は独裁国家でも実施されている。またそれは善なる無謬のイデオロギイでもない。近現代において多くの抑圧や圧政は「民意」や「国民の意思」の美名のもとに執行されてきた（そして「みんなのためだから」「多数決だから」の名のもとに行われる他者への抑圧は我々の日常でも見られる行為である）。

近代的な自由民主主義はいかにして民主主義の害悪を最小化しつつ実際の決定メカニズムとして運用してきたのか。本講義では、理念とデータの両面から検討する。様々な民主制がある中で、どのような状況においてその決定の品質が保たれたり、そもそも政治的安定性を維持できるのか、様々な先行研究に基づいて講義・検討する。近年の研究は、理念的には優れた制度と思われていたものが実際には劣った現実をもたらしていた（理念とデータにギャップがあった）事なども示している。また、民主主義が何かを知るためには民主主義ではないものが何なのかも知らなければならない。独裁とは何か、なぜ権威主義国家でも選挙が行われるのかを知って初めて、民主主義を知ることにもつながる。これらを知ることを通してこそ、我々は多様な人々の間における集会的決定を下すことに理解を深めることができる。

本学DP上の到達目標は「民主主義について論理的に思考し、自分の考えや判断を適切な方法で表現する力を身につけている」「民主主義に関する課題を自ら発見し、解決のための学びを継続する意欲を有している」となっている。これに基づき、成績評価と授業計画では以下の4点を重点とする。履修者が適切に学修を進めた場合、以下4点の知的地平へと到達できることを本科目は約束する。

受講者は本講義を通じて、1) 民主主義を冠する複数の思想や歴史を理解し、特に自由民主主義（リベラルデモクラシー）とそれに付随する基礎的諸概念と効果について、複数の相反する考え方も含め理解し説明できるようになる；2) なぜ民主主義が好ましいのか/好ましくないのか、いかなる状況や領域において民主主義は好ましいのか/あるいは特段優れているわけではないのか、複数の相反する理論や実証結果を整理し説明できるようになる；3) 民主主義下における様々な制度的バリエーションについて説明できるようになり、それが実際の民主政治にいかなる影響を与えるのか、実証的根拠とともに説明できるようになる；4) 非民主主義体制ともいえる独裁制がもつバリエーションも説明でき、それが体制変動・民主化に与える影響を理解し、民主主義体制との違いや独裁制下での選挙がもたらす効果について説明できる。また、これらができているかどうか、成績評価の基準となる。

教科書

指定教科書はない

参考書（図書館蔵書には○）

- 宇野重規（2019）『民主主義とは何か』
- 待鳥聡史（2015）『代議制民主主義—「民意」と「政治家」を問う』中央公論新社
- プシェヴォルスキ, A.（粕谷・山田訳 2021）『それでも選挙にいく理由』白水社
- ダール, R.（高島・前田訳1993）『ポリアーキー』岩波書店
- 坂井豊貴（2015）『多数決を疑う—社会的選択理論とは何か』岩波書店
- エリカ・フランツ（2021）『権威主義：独裁政治の歴史と変貌』白水社

授業計画・内容

回数	授業計画	内容
第1回	イントロダクション	イントロダクションと投票参加について理解する。授業全体の方針や進め方について受講者との間に共通理解をもつ。しかる後に、民主主義の基礎的な制度と見られる、選挙に関して、なぜ人は選挙にいったり行かなかったりするの、ライカーの投票参加理論をもとに理解する。
第2回	民主主義と諸概念1（民主と自由）	民主主義と隣接概念（自由主義・共和主義）を理解する。民主政—独裁政の差異と君主政—共和政の差異は理論的・現代的な意味において別物であることを理解する。本来別物の自由主義と民主主義が歴史的経緯によって結びついてきたことを知り、時には自由主義と民主主義が衝突しつうことも理解する。そのため現代的自由民主主義は自由をまもる諸制度（司法の独立）が必然的に含まれることを理解し、現在の自由民主主義指標（Freedom House, PolityIV）は実際にそれらを合せて世界の民主主義度を計測していることを知る。
第3回	民主主義と諸概念2（民主と包摂）	民主主義の多義性を理解し、最小限定義を示したダールのポリアーキー概念を学び、それが重要視する「競争」と「包摂」の2次元を理解する。自由で競争があっても、そこに参加できるメンバーが少なければ民主主義とは言えない。より総合的な民主主義指標であるところのV-dem指標を知り、それを通じて、たとえば、民主主義の場から女性を排除していた時期のスイスがどのように扱われているか、といった問題を検討する。
第4回	民主主義と諸概念3（民主と代議制）	直接民主主義と間接民主主義の関係性を理解する。現代において標準的な代議制民主主義の思想と対抗言説を理解する。間接民主制を擁護する側の議論として、シュンペーターの競争的民主主義観を理解し、他方で強力な対抗言説としての人民民主主義論・ポヒュリスム（とそれらがはらむ危険性）について理解を深める。
第5回	民主と独裁1	この回より理論を離れて歴史や実証を重視する。こんにちの世界が近現代史上はじめて民主政が多数派となっている事を知り、それをもちらした「第3の波」について学ぶ。ラテンアメリカ、旧共産圏、アジア、世界の様々な地域で一斉に起こった民主化の波は、様々な形態を通じて発生したことを知り、それが定着に成功したり失敗したことがある事を知る。
第6回	民主と独裁2	民主政と独裁政（権威主義体制）を比較検討する。独裁政もまた一定の制度的パフォーマンスをもとに体制維持を合理化していることを知り、民主政と独裁政の間に制度的パフォーマンスの差があるのか、当為の言説からではなく実際のデータに基づいて理解する。経済的成長に関する古典的研究から、ガバナンスにみる最新の研究まで触れることを通じて、民主政はどのような領域において独裁政より優れているのか/あるいは優れていないのかを理解する。
第7回	民主と独裁3	権威主義体制の下位分類について理解する。リンスの全体主義論・権威主義論を元に、民主政とは言えなくとも一定の政治的多元性が許容されている制度があることを理解する。現代の権威主義体制の3分類法（軍・議会党・個人）を知り、それぞれの特徴と、特に議会を通じた権威主義体制があることを把握する。そこから、選挙は民主主義の専売特許でもなんでもなく、時には独裁体制の強化につながり民主主義を棄損するだけである場合もあることを理解する。
第8回	民主と独裁4	政治体制の変動について理解する。第3の波に限らず、体制変動はいかにして発生するか幅広いデータを通じて理解する。また、権威主義体制下における体制変動とは必ずしも民主主義体制への変動（民主化）を意味しないことや、民主主義を維持することと民主化を達成することは別であることなどを理解する。ムーアの階級構造理論と、経済発展（6055ドル仮説）・格差との関連性についての基礎的な実証分析を理解の補助線とする。
第9回	民主と独裁5	独裁制と民主政を理解したうえで、そもそも民主主義という意思決定手続きがいかにして正当化できるか複数の理論を知る。特に、最大多数最大幸福原理とコンドルセ陪審定理（CJT）について学ぶ。最大多数の最大幸福に基づく正当化は容易に多数派の暴政につながりうること、結果合理性の議論としてはCJTが重要な発想である（一方批判もある）ことを理解する。ただし民主政の維持という観点から見た際、選挙結果の不確実性/戦略性こそが重要だとする議論もあることを紹介する。
第10回	民主制の多様性1	民主政下の下位分類としての執政制度について理解する。執政長官をいかにして選ぶかという制度が極めて重要であることを知り、大分類として大統領制と議院内閣制について理解する。この際、日本の教科書的な三権分立の理解には不都合もあることを学ぶ。両執政制度に当てはまらない、半大統領制や首相公選制についても理解する。執政制度の差異は民主主義の維持との関連で非常に激しい議論があり、日本の中央政治と地方政治の理解にも重要であることを把握する。
第11回	民主制の多様性2	民主政下の下位分類としての選挙制度について理解する。選挙制度を分類する方法としては、特に定数と議席変換方式が重要であり、多数代表性≠小選挙区制と比例代表制≠複数選挙区制の基礎的な制度設計ないし制度効果について理解する。実際の選挙結果などをもとにその効果について確認する。特に日本の選挙と民主主義を考える上では、多数代表性&複数選挙区制（いわゆる中選挙区制）の効果の理解は不可欠であり、その制度がもつ理論的な効果と課題について理解する。
第12回	民主制の多様性3	民主政下の下位分類としての多数決型とコンセンサス型について理解する。同じリベラルデモクラシーの諸国の中でも、実際の民主政の運用は多様であり、様々な制度や運用の組み合わせによってバリエーションを示している。これを民主政の二つの理念系とその中間とみるLijphart

回数	授業計画	内容
		の民主主義理論を学ぶ。実際のデータなどを通じて、世界の民主政のバリエーションがどのような次元で区別でき、どのような位置に置くことができるのかを理解する。
第13回	民主制の多様性 4	多文化社会における民主政の実現可能性について理解する。多数派の政治的意思に基づき政治的な決定と介入を行う民主政が、多文化社会において抱える困難を理解し、そのうえで、現実にも多民族国家でありながら民主政を維持してきた国々の観察から生まれた、コンソシエーション（多極共存型）デモクラシー理論を事例とともに習得する。他方で、本理論も多文化社会の権力分有としては万能ではなく、オルタナティブな議論もあることを理解する。
第14回	民主制の多様性 5	情報通信技術の発展と民主主義の関連性について考える。広義のE-デモクラシーのうち2つの論点を扱う。1つ目は特にSNSの発展が現在そして未来の民主主義に与える影響であり、楽観論と悲観論の双方を理解する。2つ目はインターネット投票であり、先行事例としてのエストニアの状況の解説とその問題点、日本や世界の状況について知る。
第15回	デブリーフイング	ここまでの授業の整理として各授業内容の定着を図る。授業スピードの進展の調整・授業の休講/補講・授業内での合同イベントの実施など、イレギュラーがあった場合の調整としてもこの回（に相当する回）を用いて、調整を行う。

成績評価の方法

各授業後の小テスト/アンケート：40%

期末試験：60%

小アンケート回答なし+期末試験未受験の場合、評価不能「-」となります。

事前・事後学習の内容

各回において参考文献を授業スライドに提示するので、復習やさらなる学習のためにそれを用いる事。また、自習にあつては本シラバスも参考にすること（大事なキーワード類はすべて本シラバスに記入済である）各回授業後に、その授業の振り返りもしくは次回授業の予習となる、1・2問の簡単な小テストもしくはアンケートを出す。これに回答すること。

なお、事前事後学習とは単に座学に限られない。本講義で学習した知見をもとに、現実に自らが生まれ住んでいる国や地方の政治について考えたり、受講者同士で議論を交わしたり、関連するTV報道・新聞記事・ネットメディア報道などを購読して自分なりの意見形成をすることが、きわめて重要な事前事後学習となる。

履修上の注意

担当者からのメッセージ

教養科目ゆえ込み入った法学・政治学の知識は必要ない（それがない人を想定して授業を行う）。ただし、高校卒業程度の英語・世界史の知見は必要である。

キーワード

SDG5, SDG16